

〔第28回学術集会 共催シンポジウム〕

地域にアウトリーチする病院 —With コロナ時代の「つなぎ人」としての看護職—

社会医療法人祥和会脳神経センター大田記念病院 福山脳血管医学研究所

大田 章子

筆者の所属する法人は、長らく脳神経疾患の急性期医療に特化し事業を行ってきたが、近年では回復期リハビリテーションや在宅ケア、施設介護など、急性期以降の「すそ野」となる事業を拡大している。また、自施設内に「暮らしの保健室ふくまち」を開設するなど、地域活動も積極的に展開している。

2020年春には、新型コロナウイルス感染拡大により不足していた感染防護具を地元企業と共同で開発・生産し、医療機関への供給を図った。また、市内の医療・介護関係者と協同し、クラウドファンディングを活用して介護事業所向けのプラスチックガウンを備蓄したり、クラスター発生が懸念された

学校現場における感染管理の啓蒙活動を行った。

人口減少時代を迎え、地域の安全・安心を維持するためには、病院もまちづくりに積極的に参画することが求められる。新型コロナが追い風となり、企業や学校など、異なる業種との協働も促進されてきた。With コロナ時代のヘルスケアは地域の共通課題であり、病院も従来の同業連携のみではなく、広い意味での地域連携を行う必要がある。これを実現するためには、地域のステークホルダーを「つなぐ」人材が重要であり、医療や介護、生活場面の知識と経験をもつ看護職は、つなぎ人としての適性が高いのではと考える。筆者も今後の活動を通じて、さらに探求を深めていきたい。

地域を横断的に活動する診療看護師の活動 —家族への関わりを振り返る—

糖尿病ケアサポートオフィス

中山 法子

国は、「時々入院、ほぼ在宅」を目指しており、地域で暮らすためには地域の看護力が鍵を握る。私は現在、一般病院やへき地診療所以外に、地域の看護力の向上になればと、個人事業として地域での糖尿病やフットケアに関する看護活動を行っている。個人事業の店舗で介入した認知症のA氏（80歳代女性）の事例について報告する。病状の進行に伴い、同居の嫁（以下、B氏）への攻撃的な態度が増え、B氏のうつ状態が不安視されていた。ある日A氏の跛行を認め足をみると鶏眼と爪白癬を認めた。B氏からは、A氏がB氏の介入を拒否していること、皮膚科からの抗白癬薬は本人管理で塗布状況は不明であることの情報を得た。その後は店舗での

フットケアも組み合わせ、A氏自身では難しい爪切りをB氏に指導した。鶏眼の痛みや爪の状態も徐々に改善し、A氏は足の管理をB氏にも委ねるようになり「Bが手入れしてくれて足がきれいになった」とA氏とB氏の笑顔が増えた。

また、へき地での活動では、よい意味でのお節介文化が残っており、家族や兄弟・近所の人などを上手に巻き込みながら暮らす力の逞しさを感じる。患者を取り巻く人々のともに地域で暮らす力を評価することも重要である。一方で医療介護の提供者も利用者も顔見知りであることが多く、深刻な話ほど誰にも話さない傾向や、本人が望まない形で広まってしまう危険性もあり、慎重さが求められると感じている。